



経営ワンポイント情報「不易流行」

by 目加田博史

「生かされている」生き方

「私」は、ある日、突然、この世に誕生したわけではありません。父と母のおかげです。その父にも父、つまり祖父、義祖父が、母にも祖母、義祖母がいます。さらに、曾祖父と曾祖母、義曾祖父と義曾祖母とつながってゆきます。10世代さかのぼると、512人の親がいます。20代さかのぼると524,288人の親がいます。30代さかのぼると、なんと536,870,912人。5億人を超えます。誰か一人でも欠けていれば、私は誕生していません。先祖と子孫のつながりの中に「私」が存在しているのです。

子供を授かった時の話です。妻も私も末子だったこともあり、両親はことさら喜んでくれました。ある日の朝、目が覚めて階下に降りると、妻が食卓のそばで倒れていました。食事の準備をしていたのでしょ、テーブルの上には、いつでも食事ができるようになっていました。

驚いて、抱き起し、声をかけても反応がありません。今度は少し大きな声を出しました。すると、目をあけましたが、状況が呑み込めないようで、「どうしたの？」と聞いても、何を言っているのか要領を得ません。

とにかく安静にしないといけないと思い、妻をおぶって2階のベッドに寝かしました。「僕が誰かわかる？」と聞いても、反応しません。記憶をなくしているようでした。これは、急いで病院に連れてゆかねばならないと思い、タクシーを呼びました。当時は、救急車を呼ぶと、どの病院に連れてゆかれるかわからない時代でしたので、お世話になっている京都第二赤病院に連れてゆきたかったのです。病院の救急窓口の電話番号は、兄が病気でお世話になった時に知っていたので、電話して事情を話しました。すぐ連れてくるよう

に言われ、タクシードライバーに事情を話して急いでもらいました。しかし、朝のラッシュ時で渋滞して動きません。意識不明のままの妻は時折けいれんを起こしたので、舌を噛まないように、指をハンカチで巻いて舌を押さえ続けていました。何の信仰もなかったのですが、妻がクリスチャンでしたので、見よう見まねで神に祈りました。

すると、にわかに車の動きが良くなり、普段の半分ほどで病院につきました。すると、妻も意識を回復し、「私、どうしたの？ここは、どこ？」と聞いてきました。事情を説明すると、記憶が戻ってきているようでした。

主治医の医師はまだでしたので、当直の先生が、簡単な診察をして、様々な手配をしてくださいました。その時に、医師の呼びかけに適切に答えているのを聞いて、ホッとしました。

主治医の診察があり、子供はまだ7か月でしたが、母体の状況からみて、緊急手術することになりました。主治医からは、「母体と子供のどちらを優先するか決めてください」と言われました。「両方助けてください」とすがりましたが、「万が一のことがありますので、決めてください」と書類を渡され、署名を要求されました。私は母体に○をしました。後で主治医から聞いた話ですが、「奥さんは重度の妊娠中毒で、京都で戦後4人目です。一人はなくなり、一人は植物人間で、一人は失明されました」といわれました。

病室に行くと、面会謝絶の札がかかっており、妻は寝ているようでした。室内は黒いカーテンに覆われ、電気も消えて真っ暗で、異様な雰囲気にも包まれていました。声をかけようとする、看護師さんが、あわてて制止して、小さな声で「少しの刺激も危険な状況です」と注意されました。部屋で唯一明るいデジタル計に0と200の数字が交互に表示しているのを指さすと、「血圧計」だと教えてくれました。

手術の準備が整い、妻は手術室に向かう途中、意識を回復したので、私は何か声をかけましたが、何を言ったか覚えていません。妻が看護師さんに「戻りたいんですが」と言うと、「戻しても大丈夫ですよ、準備できているから、我慢しないで」と答え、妻が「ありがとうございます」という声を聞きながら、手術室に入って行くのを見送りました。その間に、来てくれたんでしょう、義母さんの姿を見て、心強く励まされました。

12時55分。子供が生まれました。体重は1240g。妻の主治医は、「心配されたでしょう？奥さんは大丈夫です」と聞いて体の力が抜けてゆきました。

「小児科の先生から話があるそうですから、聞きに行ってください」と言われ、子供の保育器がある小児科に行きました。子供の主治医は、「申し上げにくいのですが、明日の晩が山です。黄疸が出なければ、乗り越えられます。ただ、それでも失明の危険は残っています。後は、お子さんの生命力に期待しましょう」と言われ、「よろしくお願いします」としか答えられませんでした。

窓越しにみる子供の姿はとても元気でしたが、体重記録をみると、時間の経過とともに、880gまで下がっていました。私の仕事は、妻の母乳を、子供のいる部屋に運ぶことでした。その母乳を子供が勢いよく飲む姿をみて「大丈夫」と根拠のない自信が芽生えました。妻は子供を見に行く許可がなかなか下りませんでした。許可が下りたのは、出産から3日後、小児科の主治医から、「〇〇ちゃんは峠を越しました。もう大丈夫です」と言われた時でした。妻を連れて、保育器の中で元気に暴れまわっている子供を見に行きました。すると、こどもはじっと妻を見つめて、「お母さん、遅かったね。ぼくだよ」と言っているようです。まだ、目は見えていないは

ずなのに。その後、子供は「メカボン」と呼ばれ、小児科保育器室の看護師さんによる人気投票でダントツの1位を取ったそうです。

見えない力が働き、私の出勤前に妻が倒れ、普段なら大渋滞する道路がスムーズに流れ、主治医のいる病院の救急窓口が受け入れてくれて、どちらかを選べと言われた緊急手術で母子ともに助かり、二日目山だと言われた危機を乗り越えることができました。いつしか、病室に持ち込んだ十字架に祈るようになっていました。

それまでは「(自分の力で) 生きている」という傲慢さがありましたが、この出来事を経験して、神様や仏様やご先祖様という見えない存在を意識するようになり、傲慢さが薄れ、意味があつて「生かされている」ことを強く実感するようになりました。もし、私が出勤した後に倒れておれば、妻はもうこの世にいなかったでしょうし、もし、道路がいつものように渋滞しておれば、どのような後遺症が残ったか知りません。

後で聞くと妻は、「その日は、いつもより早く起きて、お風呂に入り、新しい腹帯に変え、いつでも出かけられるように服を着替えていた。(私が) 起きてくる5分前まで覚えている」そうです。なにか感じるものがあつたのかもしれませんが。「生かされている」感謝の心で生きる生き方をこれから続けてゆきたいものです。

株式会社目加田経営事務所

<http://21cmc.jp>

那覇 〒900-0014

那覇市松尾 1-18-22 8階

TEL098-864-0331

FAX098-860-3416

Email : mec@mekata.co.jp

京都 〒603-8478

京都市北区大宮釈迦谷 4-10

TEL075-334-5105

FAX075-493-8305

好きなもの「えがお」

得意ワザ「見える化」技術

嫌いなもの「現状維持」

2日間の「マルミエ診断」受付中！！
お電話ください。 098-864-0331